

乳児期の社会性，対人関係の発達

保育園登園場面の観察から

白百合女子大学 田矢 幸江

文京学院大学 柏木 恵子

Infants' Social Development through their Relationships with Others; Observation study of infants at a nursery school drop-off

Shirayuri College

TAYA, Yukie

Bunkyo Gakuin University

KASHIWAGI, Keiko

乳児が，保育園に入園し親以外の保育士や他児とのかかわりを形成してゆくプロセスを明らかにする。都内私立 M 保育園に通園する 7 ヶ月の男児 2 名 (F, K) の 2001 年 4 月から 2002 年 3 月までの登園場面を観察した。観察には参加観察法を用いた。フィールドノートから 5 種の行動カテゴリー（泣き，笑い・笑顔，他児との関わり，親の抱っこ，保育者の抱っこ）と笑顔を向ける対象について分析した。F 君 K 君に共通してみられたことは入園当初は泣きの数は多いが，その後急激に減少すること。2 月 3 月歩行が安定した頃には親の抱っこが減り，他児とのかかわりが増えていることであった。個別にみってみると F 君は，保育者の抱っこが 1 年を通して多く，保育者の抱っこの数が多い時は，他児とのかかわりが少なく，笑顔は保育者や親に多く向けられていた。一方 K 君は，入園当初は大泣きしていたが，笑い・笑顔と他児とのかかわりが次第に増えていく。笑顔は自分の動作・行動に対するものが多かったことである。

【キー・ワード】 乳児，泣き，笑顔，社会性

This study investigates how infants build their relationships with people other than their parents such as nursery school caretakers and other children. Two 7-month-old male infants were observed for 12 months when they were dropped off at a nursery school in Tokyo. The data was analyzed according to five categories (i.e., crying, laughing/smiling, interacting with other children, being carried by parents and being carried by caretakers) and focused on the objects that the 7-month-olds smiled at. This study identified several patterns in the observed infants' behaviors: The frequency of the infants' crying was high at the beginning; however, it dropped dramatically after a certain period. Both infants became more interactive with other children when they were able to walk stably. Further aspects of the two infants' individual behaviors of smiling, crying, interacting with others are also discussed.

【Key Words】 Infant, Crying, Laughing/smiling, Social Development

問 題

0歳児を保育園に預けることに対しては、“親子関係が希薄になるのではないか”との危惧が母親から寄せられたり、“こんなに小さいのに預けてかわいそう”などの社会的批判は今なお少なくない。しかし、保育所入所児数は、出生率の減少に反して増加しており（前年比2.8%増）、2001年には保育所入所児数（3歳373,661人/全国）が幼稚園入園児数（3歳368,429人/全国）を上回り、幼稚園よりも保育所のニーズが高まってきているといえる。また、0歳児の在園児数（全国）も1999年39,984人、2000年40,075人、2001年43,841人と年々増加している（厚生労働省）。

保育園での生活は、子どもにとって集団遊びや異年齢交流など家庭では経験できないことが豊富に経験できることであり、（父親不在で）母親だけで育てられている今日一般的な育児状況に比べて、複数の保育者や仲間育てられ、育児支援ネットワークが自ら広がるというメリットがある。

赤ちゃんの誕生から1年間、子どもとその家族の成長、発達を保育園と家庭の両方から描いた研究がある（吉村、2000）。しかし、乳児期に入園した子どもがどのように親（主に母親）以外の人、他の子どもとの生活になじみ、社会的発達を遂げていくかについての実証的研究は極めて乏しい。そこでわれわれは乳児（7ヶ月児）が、保育園に入園し親以外の保育者や他児とのかわりを形成してゆくプロセスを2001年4月から2002年3月までの1年間観察し、その記録の分析によって考察することとした。

方 法

都内私立M保育園に通園する0歳児2名が6、7ヶ月で入園した時点から1年間、子どもが親と登園時に分離し、保育者に受け入れられ、泣いたり、笑ったり、他の子どもとかわっていく様子を観察した。M保育園の規模は、定員110名、クラス：0歳、1歳、1・2歳、2歳、3歳、4歳、5歳の計7クラス、職員：園長1名、主任保育士1名、保育士17名、看護師1名、栄養士1名、調理士2名、嘱託医1名、パート若干名であり、園の目標は『集団生活の中で様々な体験を通して、みんなと共に生きていることを学びたくましく生きる力を養い、物事に自ら取り組む子どもを育てる』である（園のしおりより）。

観察期間：2001年4月から2002年3月の1年間。毎週水曜日、午前8時30分から9時30分の1時間である。

対象児：0歳児クラス（同じクラス）の月齢7ヶ月の男児2名。対象児はクラス担任と相談の上、初めて保育園に入園する6ヶ月ごろの子どもであること、月齢が近いこと、第二子であること、兄弟が同園に通園している、という条件がほぼ等しくなるとの条件で園児2名を選定した。6ヶ月ごろの子どもとしたのは、その頃になるとひとりで座れるようになり、ハイハイを始めるなど、活動範囲が広がり活発になる時期であるとともに、言葉を理解し始め、身近な人を区別し、自分の意思や欲求も

表 1 対象児

	性別	入園時月齢	観察開始時月齢	観察終了時月齢	観察回数	登園時間
F 君	男	0 歳 7 ヶ月 13 日	0 歳 7 ヶ月 28 日	1 歳 6 ヶ月 13 日	30 回	8 : 30
K 君	男	0 歳 6 ヶ月 28 日	0 歳 7 ヶ月 5 日	1 歳 6 ヶ月 21 日	36 回	9 : 00

表 2 出生時の様子と家族構成

	出産方法	出生時	出生順位	家族構成	祖父母
F 君	病院で 自然分娩	3296 g 50 c m	第二子	父 母 姉	父方：他県 母方：隣市 祖父：バイクで 15 分 祖母：バスと徒歩で 30 分
K 君	病院で 自然分娩	3400 g 50.5 c m	第二子	父 母 兄	父方：他県 母方：市内，車で 15 分

出てくる時期と考えたためである。

F 君の登園時間は 8 時半，K 君は 9 時と二人の登園時間ずれていたもので，それぞれについて登園から 30 分間について観察した。観察回数に差があるのは，F 君が体調不調で病院に入院することがあったためである。どちらも母方の両親が近くに住んでおり，何かあったとき，子どもを母方の祖父母にみてもらうことがあった。対象児が所属するクラスは，園児 11 名（男児 6 名，女児 5 名），専任保育士 4 名，パート 4 名であり，常時 5 名の職員で保育が行われていた。図 1 は，観察した 0 歳児クラスの見取り図である。

観察方法：観察者（論文第一執筆者）は，1998 年から M 保育園に保育補助として週 1 回（土曜日）勤務しており，保育園の先生方とは観察以前から馴染みがあった。観察にあたり，保育園にその目的を説明し，了承を得，対象児の保護者の了承を得て行われた。観察者は，保育補助としてクラス内の保育活動に参加しつつ，対象児の見やすい位置に移動するなどクラス担任の配慮のもと観察する参加観察法である。園の方針により保育中の録画，録音，メモを取ることはせず，観察終了後すぐにノートに対象児の様子を記録し，フィールドノートを作成した。

分析方法：保育園に登園してきた時の親との分離の様子（F 君を連れてきたのは観察日は 1 年を通して母親であった。K 君は，観察中 1 回母親と父親と一緒に登園したが，登園してきた時の親とは，主に母親のことである），分離時や保育中の泣いた数，泣いた時どのように泣きを克服したのか，笑いの回数，どのくらい保育士に抱っこされていたか，他児とのかかわりについて注目した。フィールドノートから次の 5 つのカテゴリーに該当する行動を取り出し回数をカウントした（表 3）。

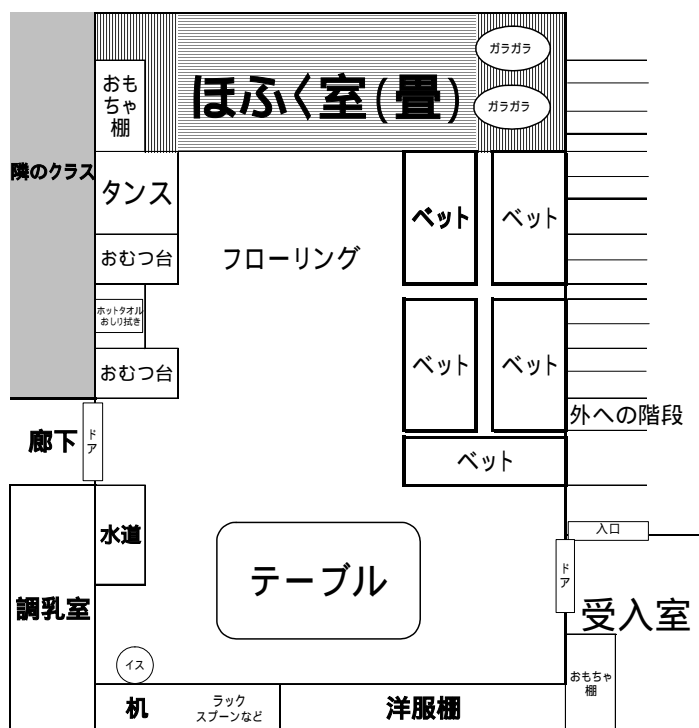


図1 0歳児クラス見取り図

表3 5種の行動カテゴリー

- 1) 泣きの数・・・観察時間中に泣いた回数をカウントした(泣いている長さ(時間)は考慮せず)。一旦泣き止んでまた泣く場合は、2とカウントした。
- 2) 笑い・笑顔の数・・・あやすと笑う、笑顔でいるなどの表情の記載をカウントした
- 3) 他児とのかかわりの数・他児をじっと見る、他児を指さして「あ!」という、他児をつかむ、玩具を引っ張りあうなど、他児との接触や他児に対する行動をカウントした
- 4) 保育者の抱っこの数・保育士、看護師、観察者の抱っこ、保育者の膝の上に座るも1とカウントした
- 5) 親の抱っこの数・・・登園から親が退室するまでの間、親がおんぶや抱っこをした回数をカウントした

フィールドノートからの評定・カテゴリーの分類は、田矢と心理学専攻の学部3年生2名の計3名で行い、最終的に一人の子どもにつき1つにまとめた。

結 果

まず4月初めのF君とK君の様子を，時系列的流れで具体的にみると，次のようであった。

F君（2001年4月18日）

- 8：32 母親がおんぶして登園する
- 8：33 母親がおむつ交換をする
- 8：35 母親が抱っこして畳のところへ連れていき，F君をマットの上に座らせる
F君：他児の方へ這って行き，じっと見てから，泣く
N先生がF君を抱っこする
母親：「なんだ，あんた泣いたのか」
N先生：「昨日はどうでしたか？」
母親：「今朝5：30に起きて，もう眠いかも。（なぜ）薬飲んでます。便もやわらかいです」
- 8：40 看護師の視診を受ける（聴診器をあてる）
F君：聴診器をあてた時は泣かないが，終ってから少し泣く。2回，弱い泣き声をあげる
が，すぐおさまる
母親：F君の口におしゃぶりをあてる
O先生が抱っこする
- 8：42 母親は，その様子を見て退室
- 8：45 O先生に抱っこされたまま眠る。ベビーベットへ寝かされる
- 9：00 観察終了

K君（2001年4月11日）

- 9：15 母親がおんぶして登園する。子どもの洋服やおむつ，タオルの補充などの支度をする
- 9：20 N先生に預ける。N先生がK君を抱っこする
母親：（K君に向かって）「バイバイ」
K君：泣く。真っ赤な顔になり口はへの字
母親：「この子は泣くのよねー，上の子は全然平気だったのに」
N先生：「でもいいじゃない，こういうお母さんの思いも体験できて」
母親が，受入室にあるお迎えボードにお迎え時間を書きに行く
K君，泣きがおさまる
母親：受入室から戻ってきて（K君に）「バイバイ」と声をかける
K君，また泣く
- 9：22 母親退室
N先生：K君をあやしたり，窓の外を見たりする
K君：N先生に抱っこされたまま泣いている
看護師が視診をする

9:30 観察終了

* F君, K君の5種の行動カテゴリー(泣き, 笑い・笑顔, 他児とのかかわり, 親の抱っこ, 保育者の抱っこ)の1年間の消長

F君, K君の1年間の5種の行動カテゴリーの消長を, 2ヶ月ごとにまとめそれぞれ6時点での回数をプロットしたのが図2, 3である。

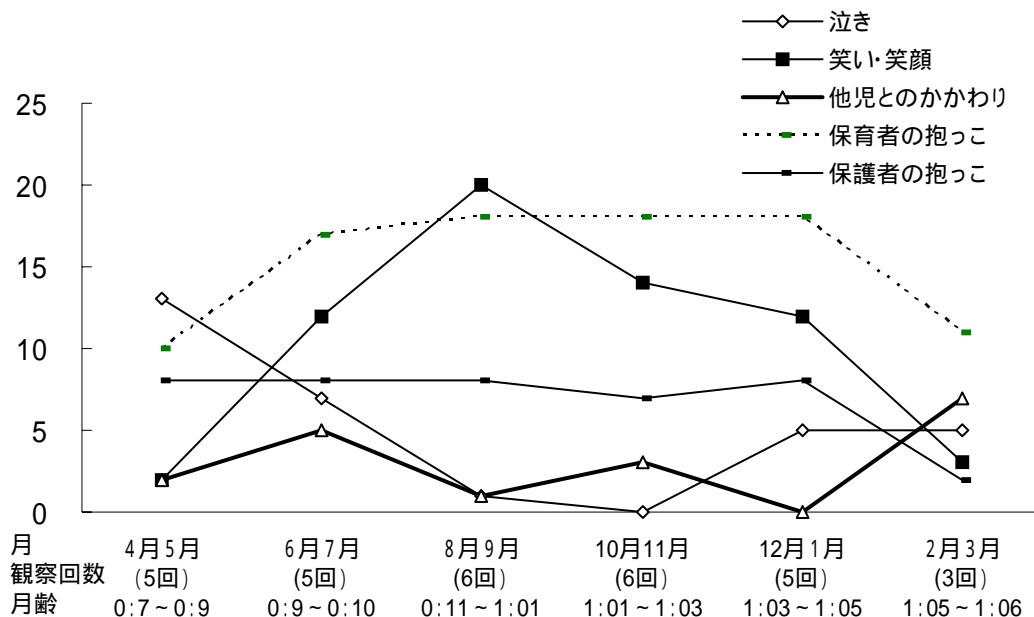


図2 F君の泣き、笑顔、対人関係の消長

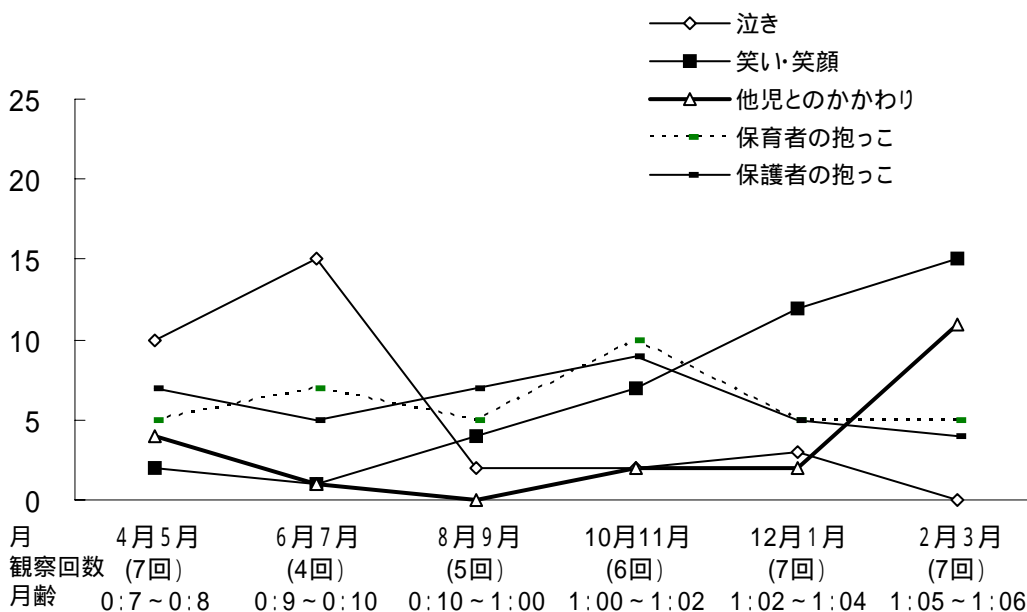


図3 K君の泣き、笑顔、対人関係の消長

ケース1：F君（図2）

* 親との分離と泣き

F君の母親はF君を保育士に預けてから，洋服やおむつ，タオルの補充などの支度をして，最後に必ずF君に「バイバイ」などと声をかけてから退室した。4月5月は分離時に泣いていた。その頃の泣きは小さい声で，笑っているともとれるような声あった（母親も“泣き笑いの顔”と言っていた）が，6月には母親との分離時に笑顔を見せるようになる。9～11月には体調不調で病院に入院することがあったが，その頃にも泣きが増えるということにはなかった。11月まで笑顔でバイバイ（分離）をしていた。ところが12月（1歳3ヶ月）になると，分離時に泣くようになる。12月の泣きは，入園当初の泣きとは異なり理由があった。それは，次の記録からみてとれる。

2001年12月12日（1歳3ヶ月21日）

母親が，F君をおむつ台から降ろそうとすると，F君は，身体を反らせて「フーン，「ンー」と言う。母親：「いやなの，そう」と言い，床へ下ろすとニコっと笑う。今度はジャンパーを脱がそうとすると，「フーン，ンー」と言う。母親：「なにになに」ジャンパーを脱がせる。F君は泣きながら，フニャフニャ言っているが，そのまま畳へつれてくる。

I先生が両手を伸ばしてF君を抱き取る。I先生の胸に顔をうずめてピタッとくっつく，F君の右手はI先生の洋服をぎゅっとつかんでいる。目をつぶり，眉間にしわを寄せている。その顔を母親が見て微笑む。母親「朝，椅子に乗っちゃダメってしたら，泣いてそれからずっとこんな調子なんです。」「バイバイ。」F君動かない。しばらくくっついている。I先生が休憩に入るため，N先生がF君を抱っこする。そのままN先生の膝の上に抱っこされてくっついている。N先生が，F君の向きを変える。目や鼻を赤くさせてポーと無表情で前を向いている。観察者が，F君の好きそうな絵本を前に置くと，手を伸ばし指差す（分離後20分経過）。ポーとみている。自ら絵本に手を伸ばして取る（分離後30分経過）。

2001年12月19日(1歳3ヶ月28日)

おんぶで登園。笑っている。おんぶ紐を外し上着を脱がせる。母親「連絡帳持って行こうか」N先生「F君、連絡帳ちょうだい。」母親と手をつないで立っている。N先生「ミッキーさんも待ってるよー、こっちだよ」畳の入口にミッキーの人形を乗せて声をかける。F君：両手で胸の前に連絡帳を持ちニコニコの笑顔で歩いてくる。F君、畳の柵までニコニコ歩いてきて、観察者の前で止まる。あと4,5歩左のところにN先生がいて「こっちだよー」と声をかけたが、(畳まで来たのに、誰も連絡帳を受け取らなかったためか)泣く。母親の方にフラフラと倒れかかり「フエー」母親の胸にピタッと身体と顔をつける。母親：「なァに、そのくらいのことでは泣かない。」N先生立ち上がりF君を抱っこする。F君は、N先生にぴたっとくっついて目をつぶり眉間にしわを寄せている。N先生「ごめんねー、今の先生悪かったねー、受け取ってあげたらよかったねー。」F君、目つぶっている。母親は、N先生にF君がはりついている様子を見て微笑んで退室。ピタッとくっついていたが、目を開けて次第に周囲を見るようになる。そばで遊んでいる他児を見る。N先生にくっついたまま絵本に手を伸ばし、自ら取る。絵本をN先生と見るように自ら座り直して、N先生と一緒に絵本を見る。(分離後10分経過)

12月の泣きは、朝、家で注意されたとか、連絡帳を受け取ってもらえなかったなどの理由があった。保育士に抱っこされると目をつぶり、保育士にくっついて自分から遊び始めるのに30分位かかる日が続いた。ネガティブな気持ちの切り替えに時間がかかるようだったが、時間が経てば、自ら立ち直り遊び始めていた。これは1歳5ヶ月という年齢になり、周囲のことが理解できるようになり、自分の感情を制御できるようになってきたためとも考えられる。

保育士にくっついている時間は、週ごとに短くなっていき、最初にいくら泣いていても、しばらくすると絵本を読んだり、クラス全体での歌のご挨拶に、大きな声でお返事をしたり、リズム遊びを楽しんでいた。

* 保育者の抱っここと他児とのかかわり

F君は、1年を通して保育者の抱っこが多く、F君自身も抱っこを求め、本を読んでもらうことを好んだ。保育者と一緒に絵本をみるときは、保育者に「これは？」と聞かれるのを望んだり、保育者が絵を指差すとF君は物の名前を言ってから先生の顔を見て微笑んだり、自ら絵を指差して、先生が物の名前を言うのを待っていた(名前を言うように要求した)。色々な物の名前を次々と覚えていった。

他児とのかかわりは、入園1ヶ月で既に他児の後をハイハイで追いかける姿があったが、保育者の抱っこが多いときは、他児とのかかわりが少なく、保育者の抱っこが減った2月3月は、他児とのかかわりが特に増えている。このことから、保育者の抱っここと他児とのかかわりが両立しにくいと考えられた。

* 泣きの減少と笑い・笑顔の増加

図2を見ると、入園当初は泣きが多く笑顔が少ないが、次第に笑い・笑顔が増え、泣きが減少していく。保育者の抱っここと笑い・笑顔が連動した動きとなっている。

ケース2：K君（図3）

*親との分離と泣き

K君は入園当初大声でよく泣いた。保育者は、声をかけてあやしたり、窓の外を見せたりとK君の気分を変えるよう工夫していた。抱っこしていた保育者がなんらかの理由で、その場を離れなくてはいけなくなったり、周囲の保育者や子どもたちが、おむつ交換のために畳から出て行くなど、保育者が立ち上がるだけで泣いたり、他児が泣くと一緒になって泣いていた。落ち着いたかなと思うと、思い出したように、か弱く泣いた。5月におもちゃを口に入れたり、握ったりなど一人で玩具で遊ぶ姿もみられたが、このような泣きは7月初めまで続いた。

母親は子どもに泣かれると保育園を出づらくなって、また声をかけたり、あやしたりしていたが、「最初泣いてはいますが、しばらくすると元気に遊んでいますよ。心配いりませんよ。」との保育士の声かけにより洋服やタオルの補充などの支度をしている間、K君を自分の側で過ごさせ、遊び始めるK君の様子をみて、母親は退室するようになった。8月以降分離時にほとんど泣かなくなっている。

*保育者の抱っこと他児とのかかわり

K君は、保育者の抱っこが1年を通してそう多くない。4月から7月は、登園時に泣いていたので、保育者の抱っこは多いが、8月9月は保育者の抱っこが減っている。K君が自分から抱っこを求めることは観察中は少なく、先生が膝の上に座らせようとするのが嫌がって、畳に座ることを好むこともあった。10月に保育者の抱っこが増えている。その内容は、麦茶を飲みテーブルへ移動するためとか、外に行くためなどの移動のための抱っこが多かった。他児とのかかわりは、10月以降増えてゆく。10月の他児とのかかわりは、他児を覗き込む、じっと見る姿であり、2月3月には、朝クラスに入ると、他児に近づいていき、「キャアキャア」と言って笑いあう姿はみられた。喜んで登園している様子と受け取れた。

<K君の他児との関わりの記録>

2002年3月6日（1歳6ヶ月0日）

母親の前を歩いてクラスに入ってくる。すぐに畳のところまで歩いて行って、ニコニコ笑って柵のところ立っている。他児（3人）もK君のところへ近づいていき、「キャアキャア」笑いあっている。K君は、柵伝いに右へいたり左へ行ったり、両手で柵をもってガタガタと揺らす。

*F君とK君の共通点と相違点

二人とも入園時（月齢7～9ヶ月）は泣きの数が多いが、その後急激に減少する。親の抱っこの数は、登園時に抱っこやおんぶで来るときと、保育士に預けるときに抱っこすることだったが、親が保育園にいる時間は10分前後と短いため、どちらもそう多くない。2月3月に、親の抱っこは減り、他児とのかかわりが増えている。この頃（1歳5ヶ月）には歩行が安定し、歩いて登園する姿が見られるようになる。自分で好きなところへ歩くことができ、他児に近づいていくなどの行動が多くみられた。

個別にみえてみると、F君は、保育者の抱っこが1年を通して多く、他児との関わりが少ない。そし

て保育者の抱っこと笑い・笑顔の回数が同じような動きをしていた。一方、K君は、入園当初大泣きし7月初めまで泣いていたが、保育者の抱っこは1年を通して多くない。笑い・笑顔と他児とのかかわりが次第に増えていく。F君とK君の5種類のカテゴリーの回数を1年間で平均して示したのが、図4である。

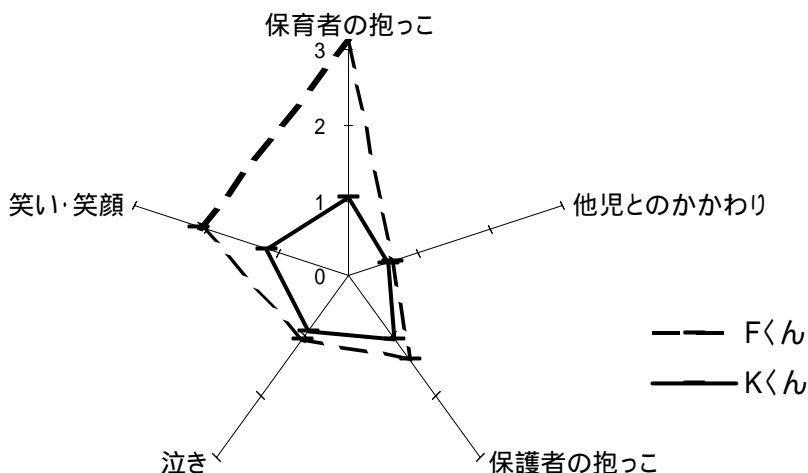


図4 0歳時の二人の特徴(1年間の平均)

F君の方がどのカテゴリーもK君よりも回数が多く、特に保育者の抱っこと笑い・笑顔が多かった。K君は、5種のカテゴリー中で飛びぬけて多いものはなく、どの内容の平均も同じくらいである。

* 笑い・笑顔

フィールドノートを何度も読むうちに、二人の笑いの意味・対象が異なる印象を受けた。例えば、F君は、“クラスに入ってきた時、保育士に対してニコニコしている。”“母親「バイバイ」をしたとき、笑顔で見ている”などであり、保育者や親への笑顔が多いのに対して、K君は“テーブルにもぐってニコニコしている”“積み木を乗せてニコニコしている”など自分の動作・行動に対する笑顔が多く、何に向けられた笑顔なのか、対象にも違いがあるようだった。そこで二人の笑い・笑顔について、何に対する笑顔なのか再分類を行った。1) 自分の動作・行動に対する笑い・笑顔、2) 保育者への笑顔、3) 親、姉、兄への笑顔の3つについてカウントした。図5は、F君、K君の1年間の3種の笑顔の合計回数である。

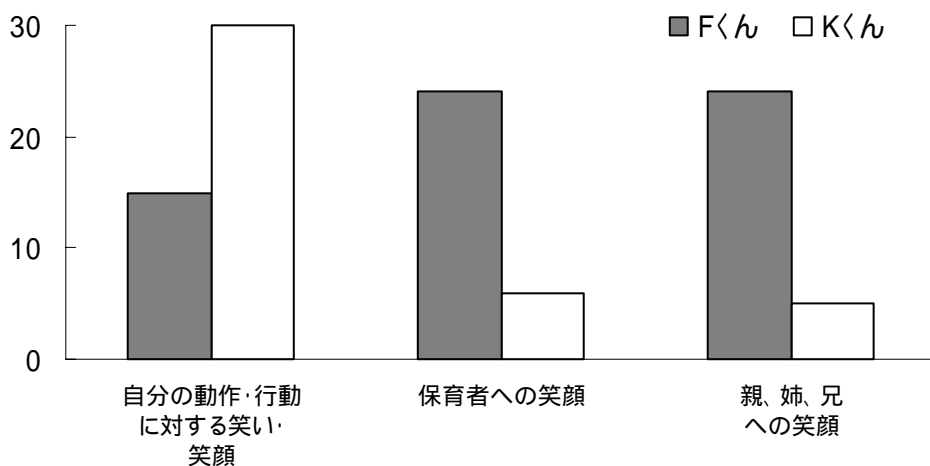


図5 3種の笑い・笑顔: F君、K君の1年間の合計回数

図5を見ると，明らかに二人の笑い・笑顔の対象が異なっている。F君の笑いや笑顔は，保育者に多く向けられていた。これは，保育者の抱っここと笑い・笑顔が連動した動きとなっていたことを考えるとF君の笑顔が保育者の抱っこを誘っていた可能性が推察される。一方，K君は保育者や親や兄に対する笑顔よりも，自分の動作・行動に対する笑いが多かった。3種の笑い・笑顔の回数を2ヶ月ごとにまとめそれぞれ6時点でプロットしたのが図6，7である。

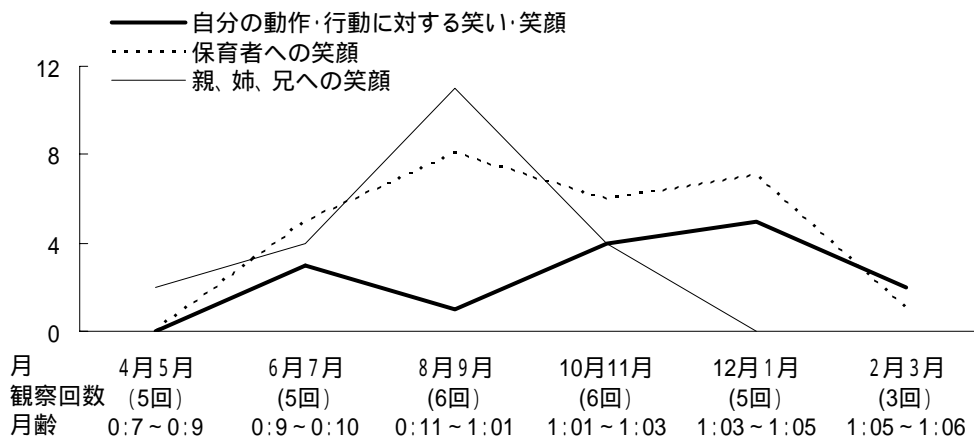


図6 F君の笑い・笑顔

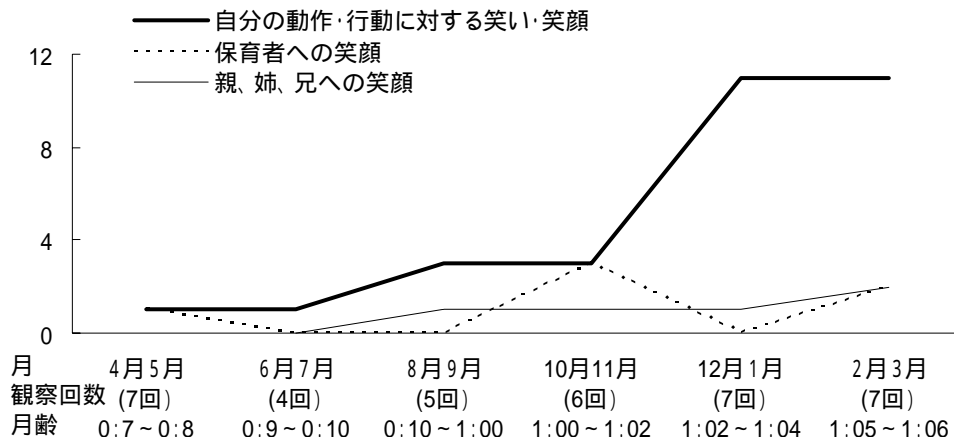


図7 K君の笑い・笑顔

1年を通して3種の笑い・笑顔の対象がどう変化したのかを見てみると、F君もK君も保育者への笑顔と親・姉・兄への笑顔の2つの線は、親・姉・兄への笑顔が多いと、次は保育者への笑顔、また親・姉・兄への笑顔と、この2つが交差しながら似たような線を辿っている。このことは、親、姉、兄だけでなく、保育者との関係を徐々に築いていっている姿とも考えられる。2つと違う動きをするのが、自分の動作・行動に対する笑い・笑顔である。F君は2月3月いずれも笑顔も減少しているのは、観察回数が3回と少ないこともあるが、3種の笑顔の中では自分の動作・行動に対する笑い・笑顔が多くなっている。一方K君は自分の動作・行動に対する笑い・笑顔が先生や親への笑顔よりも多く、1年を通して増えていき、12月以降急激に増加している。この頃には人との関係の中で安定して自分の楽しみを見つけられるようになっていたのではないだろうか。

* 担任の保育士からみると二人はどのような子どもなのだろうか？

2002年3月に担任保育士にF君、K君それぞれについて質問紙調査を行った。質問紙の内容は、1.対象児の家族構成、2.子どもの様子、3.両親の印象、であり、2と3は自由記述で回答を求めた。質問2「先生からみて、〇〇君はどのようなお子さんですか？」の自由記述の回答を紹介する。

表4 「先生からみて、〇〇君はどのようなお子さんですか？」

F君	<ul style="list-style-type: none"> ・ 愛嬌がある ・ 大人への人見知りはない。 ・ <u>よく甘える(甘え上手)</u> ・ 周りで自分の名前が出ると、“何かあるな?!”と予測できる。感じるとすぐにその場で動き表情が止まる。自己意識が高い?) ・ 泣く事で思いを受け入れてもらおうという姿があるが、放っておかれると周りの状況をよくみて、<u>自ら切り替え遊びだす</u>
K君	<ul style="list-style-type: none"> ・ <u>穏やかな性格</u> ・ 友達に対しても優しく、攻撃的なところが全くない ・ <u>自分から遊びを見つけよく遊んでいる</u>

考 察

0歳児にとって保育園は、家庭で親と過ごしていた生活からはじめて離れて、保育士や他児と出会う場である。7ヶ月から1歳6ヶ月までの保育園登園場面の観察から得られた0歳児保育の様子を紹介すると、保育士は、親との連絡、保育士間の連絡を非常に密に行っていたことが印象的であった。0歳児はまだ話すこともできないし、体調も急にかわりやすく、見落とすと大事に至る可能性がある。子どもの生理的身体的な変化を連絡帳だけでなく、口頭で実にこまやかに連絡を取り合っていた。

F君 K君はともに入園時の泣きの回数は多いが、その後急激に減少する。またたとえ朝泣いていたとしても、ずっと泣き続けているのではなく、少し時間が経てば自ら遊びをみつけて過ごしていた。F君の場合は、4月5月に小さい声で少し泣くが、時間が経つと、自分から遊びをはじめ、絵本を複数の保育士に読んでもらうのを好み楽しんでた。物の名前を次々と覚えていった。そして保育者や親に対する笑いや笑顔が多く、その笑顔が保育者の抱っこを誘っていたことが推察された。そのことから、担任保育士はF君のことを“甘え上手”と記述しているのであろう。保育者の抱っこの数が多い時は、他児とのかかわりが少なかった。保育者の抱っこの数が減った2月3月（1歳5ヶ月）は、他児とのかかわりが増えている。また同じ頃、自分の動作・行動に対する笑いが保育者や親への笑顔よりも多かった。

K君の場合、4月に大声で泣いたが、笑い・笑顔が6月以降どんどん増えていった。その笑いの内容は、自分の動作・行動に対する笑いや、笑顔でいるというものであった。5種の行動カテゴリーを1年間で平均した図4をみると、飛びぬけて多いものはなく、自分の動作・行動に対する笑いが多いことから、保育士が“とても穏やかな性格”と記述しているように、穏やかに安定した状態で過ごしていたのではないだろうか。他児とのかかわりは1年を通して多く、10月以降特に増えている。歩行の開始、安定に伴って他児に近づいていく姿が見られるようになり、1歳6ヶ月では、他児のところに近寄って行き、他児と“キャアキャア”笑いあう姿がみられた。

以上の分析の元になった観察は、既に述べたように、対象児のいるクラスに保育補助の立場で入り観察を行う参加観察法によっている。このような参加観察法であることから観察者はクラスに自然に溶け込み、子どもにも親にも保育士にも違和感を与えず自然な保育場面が展開されていた。このような通常の保育の様子を観察によって、そこで育つ子どもの様子、発達をありのまま伝えることができたと思われる。0歳児の社会性、対人関係をとらえるため、今回は、泣き、笑い・笑顔、保育者の抱っこ、親の抱っこ、他児とのかかわり（指差し行為、接近、接触）、笑顔の対象の違いを分析した。他児とのかかわりは2歳3歳と年齢が上がると共に増え、より複雑になってゆくその後のプロセスを辿りたい。

今後の課題として、子どもの数が二人と少ないこと、観察期間が1年間と短いことが挙げられる。今後は、今回の子どもの選定基準を基に対象児を増やし、長期的に子どもの社会性の発達、他児とのかかわりとらえる必要がある。また本研究は観察データを中心に分析しているが、保育士や親に子どもの様子や気質について質問紙調査をするなど、より多角的に検討をする必要があるだろう。

文献

- 網野武博・高辻千穂ほか 2003 0歳からの保育が及ぼす影響に関する縦断的研究1：総論及び縦断的研究の主旨 日本保育学会第56回大会論文集 p.624-625
- 檀田綾子・伊志嶺美津子・浅野ひとみ 1985 乳幼児の社会性の発達に関する縦断的研究4：乳児期の対人行動のタイプ 日本教育心理学会第27回総会論文集 p.162-163.
- 柏木恵子 1988 幼児期における「自己」の発達. 東京：東京大学出版会.
- 柏木恵子 2001 子育て支援を考える：変わる家族の時代に. 東京：岩波書店
- 柏木恵子・蓮香園 2000 母子分離＜保育園に子どもを預ける＞についての母親の感情・認知：分離経験および職業の有無との関連で 家族心理学研究.14,1,pp.61-74.
- 金田利子・諏訪きぬ・土方弘子 2000 「保育の質」の探究：「保育者-子ども関係」を基軸として. 京都：ミネルヴァ書房.
- 厚生労働省 2001 社会福祉施設等調査報告
- 厚生労働省 2002 人口動態統計
- 前田正子 1999 少子化時代の保育園. 東京：岩波書店
- 三宅和夫（編著）1991 乳幼児の人格形成と母子関係. 東京：東京大学出版会.
- 文部科学省 2001 文部科学統計要覧
- 柴崎正行 2003 乳幼児にとって保育園のくつろぎ空間とは. 発達 96,24,pp.5-11.
- 田島信元 2000 社会的相互交渉と子どもの人格発達. 東京：多賀出版.
- 高辻千穂・安治陽子ほか 2003 0歳からの保育が及ぼす影響に関する縦断的研究2：国際研究に関する文献考察 日本保育学会 56回大会論文集 p.622-623.
- 塚本妙子 1985 乳児の泣き（1）：生後1年間の発達的变化と泣き声の分析 日本教育心理学会第27回総会論文集 p.156-157.
- 友定啓子 1992 乳幼児における笑いの発達：1歳児から2歳児へ 日本家政学会誌 43,8,pp.735-743.
- 友定啓子・山口大学教育学部附属幼稚園（編著）2002 幼稚園で育つ. 京都：ミネルヴァ書房.
- 臼井博・松本聡美 1998 2～3歳児の保育園生活の校正と社会的発達：ethnographicalな分析 北海道教育大学紀要,49,1,pp.49-62
- 吉村真理子 2000 0歳児の保育. 京都：ミネルヴァ書房.

<謝辞>

観察に承諾して下さったM保育園に感謝申し上げます。またF君とK君の健やかな成長をお祈り申し上げます。